

も引き出せない。それから大騒ぎとなり隣席の人に壺を持つて貰つて一生懸命引つ張つて見たが、たゞ手が痛いばかりである。

「醫者を呼ばうか」

「いや壺の口に油でもぬつては」

と云ふ様な騒ぎで酒宴の興も醒め果てた時、一人の分別らしい者が、

「お待ちなさい。昔司馬温公は水瓶を割つて中に陥つた子供を助けたと云ふこ

とだが、こうなつてはこの壺が如何に高價なものでも、お老人の手には代へら

れない。一つ司馬温公の古智にならつて、割つてお老人の難儀を助けて上げる

以外には方法がありませんまい」

と青くなつた主人を尻目にかけて、壺をはつしとばかり割つた所、金米糖は

座敷一面に散り落花狼藉の體である。一同は

「お老人、お助かりでしたとれ〜」

と老人の手を見ると、抜けぬも道理、老人は金米糖を手一杯掴んで居たのである。

掴んだ金米糖を放しさへすればいゝものを、握んだが最後金輪際放さないのだから、自由を失つたわけで、人生にも名譽を掴み、金錢を掴み、權力を掴んで放すべきに放さないで苦しんで居る者が誠に多いのである。

一寸した注意で大發明

むかしの染料は草根木皮や、葉莖、花等から採つたもので従つて其の種類の類も少く、その使用法も非常に不便であつた。

それが今日の様に吾々が好みのまゝ、いろ〜の色彩の染料を用ひることが出来る様になつたのは全く人造染料の發見のお蔭である。

人造染料は今から約八十五年程前英國ロンドンの名もない十九の青年ウイリ

アム・バーキンの発見したもので、バーキンは當時、獨逸の科學者ホーフマン博士の助手をやつてゐたが、彼の仕事はアニリンを重クローム酸加里と硫酸とで酸化し、マラリア熱の解熱劑として必要なキニーネを造ることであつた。ある日バーキンが、仕事にとりかゝつてゐるとアニリンの中に不純物として含まれてゐたトルイヂンから赤い鹽基性の染料(マゼンタ)が出来るのを見つけた。バーキンは、これは面白い。何かに利用出来ないものかと考へ、早速當時染物の盛んだつたフランスのリヨンに行つて、絹物に染めて見た所、それが葵に似た美しい赤紫色に染つたので大いに喜んで直ちに專賣特許をとり、ドンドン製造して賣り出したもので、無名の一青年は一躍巨萬の大財産家になり同時にその名は、内外に鳴り響いたのであつた。若し普通の人の様にバーキンが注意力を缺ぐ人間であつたら、最初、目的のキニーネが出来ないで、不純物が出来たりしたら、癩癩玉を破裂させて、人造染料などと云ふものは、発見出来なかつたであらう。

僅かな注意でも、吾々は常に忽せにせず考察して行つたら、それから奇蹟の如き大事業を発見することがあるのである。

この機轉

芝浦製作所創業の大恩人大田黒重五郎氏が、まだ三井物産の一課長であつた頃の話である。或る年社用を以て關西方面に出張した。先づ大阪に着いて三日目、支店に行つて見ると本店から一通の手紙が來て居た。それは部下の事務員武村貞一郎が出したもので、自分が出張した後の出來事や事務の打合せが、詳細にキチンと書いてあつた。有望な青年だと平素から目をかけてゐた武村のやり方に、大田黒はすつかり氣に入り「なるほど武村は氣が利いとるわい」と會心の笑を洩らしたのであつた。

其の後武村の通信は一日も缺かさず来た。大阪をたつて神戸に行つて見るとそこにもちやんと届いて居る。下關に行つても、福岡に行つても、引返へして京都に来て、間違ひなく彼の後を追つて報告が来て居る。三日も五日も滞在する土地ならばとにかくとして、僅か一日しか滞在せぬ所にも必らず手紙が来たので、大田黒は、それによつて、旅行に出て居ながら、課のことは細大漏さず知ることが出来、大變落ちついて用件を片づけることが出来たのであつた。が一面「武村は俺の行く先々と日取りを、かうも確實に知つて居ることはどう云ふわけだらう」と仕舞ひには薄氣味わるくさへなつたのであつた。

大田黒は歸京すると早速武村に

「どうして君は、あんなに確實に俺の行く先がわかつたのだい」

「なあに、なんでもありませんよ」

と武村は笑ひ乍ら答へた。

「しかし、どう考へても不思議だからな。行先々々一日も狂はず、ピタリとあてるんだから、まるで密偵でもつけられて居る様だよ」

「なんでもありませんよ。實は課長さんの御豫定が三日は狂はないものと考へそこで同じ通信を三通複寫しまして、こゝぞと思ふ三ヶ所に發送したに過ぎません」

大田黒は、すつかり感心した。其の後武村は大田黒の推薦によつて、次第に重要視され、後三井王國の重鎮益田孝氏に認められ、三井物産の重役に推薦される様になつた。

人を率ゐる道

榎本武揚氏が遞信大臣であつた時、一日清水次郎長を訪問している／＼話したことがあつた。その時

人を率ゐる道

「自分は今大臣として四百人ばかりの役人を使つて居るが、なか／＼思ふやうに行かぬ。お前は昔五千人の子分を手足のやうに使つたと云つて居るが、それには何か秘訣があらう。一つ教へてはくれまいか」

「そんな秘訣なんかございません」

「しかし、あれだけの子分がお前の顎の動かし方一つで自由になつたのは、何か日頃の心得があるであらう」

「左様でございますね。別に何も心得はございませんが、只だ私はどんなつまらぬえ野郎でも、決して人前では叱言を言つたことがありませんでした。愚痴もなるべく人前では云ひませんでした」

人に自分の威力を誇示しようと人前で下のものを嘔鳴つたり、過去つたことを、あゝだこうだとその當人の居ない所で愚痴つたりする様では人の上に立つことは出来ない。

朝鮮の雲母王

「いゝ事業があるんだが、少し資金がないかね」

或る電鐵會社の課長 心得をして居た關島吉氏の所に、當時朝鮮滿洲あたりをゴロ／＼して居た林と云ふ男が訪ねて來た。

「何だい、その事業と云ふのは」

「朝鮮でね、鴨綠江を四十里位溯つたところに大金鑛があるさうだ。それが露天掘りだから工費も要らない。朝鮮人にうまく話をつければ安く引取れるんだがね」

「それは君ほんとか、いくら未開の地だつて金銀が露天にピカ／＼してれば誰だつて占領して仕舞ふよ、馬鹿も休み／＼云ひ給へ」

せゝら笑ひに葬らうとしたが、林君は

「とにかく、朝鮮満洲には人跡未踏の地が多いんだ。男子一度志を立て、上京するは昔のことだ。男は須らく満鮮の地を踏まなくては一人前ぢやないぞ」
こんな冗談見た様な話が次第に真剣になつて 關氏も

「なるほど、ものは當つて見ろだ、行くか」

と乗り出した。熟慮斷行だ。彼はいろ／＼考へて見た擧句、行くことにし會社に辭表を出した。今隆々として成績のいい會社に、これから次第に昇進すべき地位を棄て、よくも知らない未開地に行かうと云ふのだから、無謀と云へば無謀である。殊に當時の朝鮮には未だ皇化に服せざる者があり。時々暴民の起るのも稀ではなかつた。

關氏は、あらゆる危難を冒して、鴨綠江を遡つた。海の様な川、二抱へもある様な、大木が簀の子の様に繋つて流されて来る。ときには奇怪な獸がほえてゐる。奥には、どんな大木が繁つてどんな猛獸が暴れ廻つてゐるのかな……

と物凄しい豫感ばかりで胸が一ぱいになることがある。流石の關氏も時には「金鑛どころの騒ぎぢやない、えらいことになつたものだ」と、慄え上ることもあつた。

しかし乗りかゝつた船だ。日本人だ、吾々には進む以外に道はないのだと自らを勵まし、どん／＼遡つて行つた。かくて、十數日を費して漸く人の噂に上つて居た金鑛があると云ふ山へ來たが、人跡は勿論ない。たゞあるものは猛獸の糞や、腐れ倒れた大木の根っこ、それに岬々たる岩石のみである。同伴者、林君や他の二三の連中は怯氣を慄つて弱音をはき始めた。

「引き返へさう」

一行のものは幾度か、絶望の叫びを上げた。案内人の朝鮮人も、もう先きへ行く勇氣はないと云ひ出した。かくて一休みしてゐる時、岩石の間にピカリと光つたものがあつた。大発見だ！と誰か叫んだ。一行の人たちは群つて、

しらべて見た。が、それは金鑛ではなく雲母石であつた。雲母は附近一帯を埋めるほど露出してゐるが、雲母は關氏等の目的物ではなかつた。

「雲母ちや仕方がない」

一同は再び絶望のドン底に陥り、かくて尙十數日も調査して廻つたが遂に金鑛を發見することが出来ず、旅費は次第になくなり、遂に一行は涙を飲んで引き返して内地に引上げた。その後數ヶ月、關氏は、なす仕事もなく苦しい浪々の身を友人の家に過して居たが、その内、三菱が大量の雲母を要求してゐることを、友人が話して呉れたので、彼は早速持ち歸つた雲母岩を三菱に持參して見せた所、三菱でも大變乗り氣になり、これならいくらでも引取ると云ふ商談をすませた。

勿論資金も三菱から貸して呉れた。彼は早速探掘權の許可を得て多くの朝鮮勞働者を引率して雲母岩の大量探掘に着手したのであつた。爾來幾多の困難に遭遇したこともあつたが關氏はよく、この困難を切り抜け、現在では専門家を雇つて大仕掛な探掘場を築いたのである。鑛區も續々發見して遂に三十五區に及び、附近にはこの事業を中心にした鑛山町さへ出来てゐる。彼は財數千萬圓に上り、朝鮮の雲母王として世界各国を相手に大取引をなして居る。

横田千之助と星亨

巨人星亨が衆議院議長をしてゐた頃、毎日星家に新聞を配達に来る色の黒い倭小な一青年があつた。後の司法大臣横田千之助で、彼は當時政界の大立物、星氏の名聲を慕ひ、その學僕たらんと欲したが別にいゝ手蔓とても無かつたので唐突に「書生に採用して貰ひ度い」と云ふ簡單な手紙を送つた。

すると、この素直な飾氣のない行爲に星氏は感じ、「兎も角來て見給へ」と云ふ返事をよこした、彼は雀躍りして早速訪問したが折悪しく星氏は留守で奥様

が出て来た。見ると色の黒い背の低い汚ないかつこうをした小僧なので、奥様は玄關子に命じ體よく斷つて了つた。

彼は憤然として立去つたが直ちに星氏に向つて問責状を送つた。

「苟くも衆議院議長ともある貴下が、他人と約束をし乍ら、居留守を使つて玄關拂ひを喰はせるとは何事ぞ、察するに貴下は、私の貧しい服装を書生から聞いて故意に居留守を使つたに相違ない。人間の眞價は服装などで分るものでない事は百も御承知の事と思つて居たが、貴下も矢張り凡俗の悲しさ外見を以て人を判断しやうと云ふのか……」

と手厳しく喰つてかゝつた。流石は剛愎な星氏！「面白い奴ぢや、使つてやらう」と早速採用することになり、爾來星氏のもとで薫陶されて辯護士となり、後政界に入り、剛愎にして機略縦横、我が政界史に名をなす人物となつたのであつた。彼を採用した星氏もえらいが、星氏に著眼した横田もえらいと云はね

ばならぬ。

ジョン・ワナメーカー

世界の小賣商王と云はれて居るジョン・ワナメーカーは、一九一八年、歐洲大戦の當時、米國の實業家連が組織した會の會合で、彼がした最初の借金しかも最も大きな買ひ物に就いて話したことがある。それは日曜學校に通つてゐた頃、その先生から二弗七十五仙の赤皮表紙の聖書を買つたことがある。勿論それだけの金があつたのではない。月賦拂ひであつた。そして其の金を拂ひ盡すまでに一年半かゝつたといふのである。何と云ふ大借金ではないか、何と云ふ大買物ではないか。

それによつて彼は一生を通じての大教訓を得た。即ち借金はするものでないといふことであつた。彼はこれを商業のモットーとしてゐる。即ち現金仕入れ

に現金賣り、そこに彼は商賣を開拓しそこに彼の成功の理由もあつた。

もう一つの實話、彼は或るクリスマスに當つて、その貯へた幾何かの金を以て、愛する母への贈物を買ひに行つた。彼は大變母思ひであつたので、何を贈つたら母が喜ぶだらうかと、小さい胸を躍らせ乍ら店を見廻はすと丁度自分の懷鹽梅と合ひそうな襟飾りが見つかつたのでそれを買ふことにした。すると又別のものが目についた。それに取り換へたくなり、そのことを店員に相談した。すると店員は、もう賣買の話のすんだものを取りかへるわけには行かないと拒絶した。その店員の言葉は少年ジョンの心を非常に痛ましたことは勿論である。事實そのつかまされた品は賣れ残りの品だつたのである。そこで少年ジョンは考へた「もし僕が商店を開業する場合はいつでも品物を取りかへる主義をとらう」と。

これも彼の少年の頃の出來事である。彼はある店に何か買ひ物をしに出かけたが、自分の欲しいものがなかつた。そこで彼はその店を出ようとした。すると店員は彼を捕へて、冷かし放しでは困る、買はなきやいけないとなぢつた。いや／＼ながら彼は買はされたのである。少年ジョンは又考へた「もし僕が商賣を始めたら自由に店の品物を見てもいゝことにしよう」と。

かくて彼はあらゆる經驗を取つて以てお客心理を捉へたのである。ワナメーカー商店の創意である「返品御自由」「觀覽御自由」のスローガンはかくして出來たのである。この制度によつて彼の店は世間の信用を博し、大成功への基となつたのである。

岩崎彌太郎の少年時代

大三菱の創始者、岩崎彌太郎は、少年の頃、寺子屋で漢籍の教育を受けて居た。彼の先生は謹嚴な村夫子で素讀の時も神棚に燈明をあげること忘れな

程であつた。

生徒は一週間に教場を掃除させられ、神棚の油皿を全部洗い清めさせられることになつてゐた。ところが、その油皿は二三十もあつて、その油を落すのは容易なことではなかつた。生徒は皆皿洗ひを嫌つて押しつけこをして居た。しかも先生から御叱りを受けるのは、きつと油皿掃除で、どうかするとやり直させられることも珍らしくなかつた。

彌太郎少年は當番になると、彼等の一番嫌ひな油皿掃除を引受けて、皆のものが知らない間に洗つて仕舞ふのが常であつた。しかも先生に叱られることもなかつたので皆のものは不思議に思つて居た。

「君はどうして油皿を掃除するのか」と皆が訊いても彼は笑ひ乍ら「君等はどらしてやるのかね」と訊き返して平然としてゐた。

勿論他の者達はこれを一枚一枚油を拭ひ取つてゐたから、二三十枚の掃除を

するには小半日もかゝるのが常だつた。が彌太郎は人の居ない裏庭に藁を集めてその上に油皿を竝べ、火をつけて油を焼いて仕舞つて、冷却するのを待つて、そこに出来た藁灰を以て拭き取つて仕舞ふのであつた。だから他の者が小半日もかゝる仕事を、彼は一時間もかゝらないで完全に清浄にして仕舞ふのであつた。

皆の者は、「岩崎の奴なかくずるいや」と、はやしたが先生は、

「彌太郎は、見處のある奴だ」と舌を捲いて居た。偉ものは幼少の時から著眼點が異つてゐるのである。

安田翁の偉さ

安田善次郎翁は一代の大成功者として誰知らぬ者もなく、安田銀行、安田保善社等を始め翁が我が國財界に於ける足跡は誠に大なるものがある。

翁がかく巨富を作つた原因はその著眼點が常に非凡であつた爲だと云はれてゐる。ある時、地方から廣い面積の水田を買つて貰ひたいと云つて申込んで来たものがあつた。値段は相當の金額になるが、小作米の収入から、いろ／＼の失費を控除しても、なほ利廻りが大變よいので翁は買つてもよいと思ひ、一日自分自身その實地踏査をする事にした。

さて當日になつて翁はその地方に出かけたが、買ふうと云ふ水田へは行かず、先づ氏神村社參拜に出かけた。

「ついでにお寺へも參詣したいから御案内して下さい」

と云ふ風で肝心な水田にはなかく行かない。賣手の村の人は、

「安田さんはえらい大金持ちだ。あゝ云ふ風に水田は見もしないで、取引等も大まかになさる積りだらう」

と云つた程であつた。所が翁は用意周到でその著眼點も非凡であつた。翁は

神社佛閣を見て水田を評價してゐたのである。若し神社佛閣が荒廢して居れば神佛を粗末にする様な地方は人氣が荒んだ證據で、小作料等もとれないから、買ふのを止めるのである。神社佛閣が清淨に手入れがしてあれば、その次は小作人の家を覗いて見る。家の中がキッチンと片附いて居て、屋敷の少しの空地もそのまゝにせず何か植ゑつけてある様だつたら、ものごとくに眞面目な小作人である。それから始めて買はうと云ふ水田を視察に行くと云ふやり方で始めてその水田を買ふと云ふわけであつた。その著眼點の非凡さと用意周到なる觀察こそ翁の大成した原因だつたのである。

人生と著眼點

定價 一圓
滿鮮臺外地
定價 一圓十錢

印檢者著

昭和十四年六月十六日 印刷
昭和十四年六月二十日 發行

著者 內田 鐵 洲

東京市神田區神保町二丁目六番地

發行者 與 座 正 仁

東京市本鄉區眞砂町三十六番地

印刷者 龜 谷 良 一

東京市神田區神保町二丁目六番地

發行所 興成館

振替東京一三三〇八八番
電話九段(33)二一四六番

内田鐵洲先生編著 [最新刊]

不滅の心の訓

得意冷然・失意泰然

これを大丈夫と云ふ。

吾々は常に大丈夫の心掛けを持つて、社會の大道を正々堂々と闊歩し、泰然自若として死んで行き度いものである。

本書は、人間社會に於ける不滅の心の訓を編述し、如何なることにも正を踏んで動ぜず活社會に躍進せんとする者の必讀すべき書である。

内容一般

- 希望と信念
- 偉大なる精神力
- 死と悟り
- 事物の真相
- 英雄と偉人
- 社會と人生
- 人と運
- 恩と怨
- 身を持つる道
- 安心立命
- 親心子心
- 富と財産
- 賢人と愚人
- 機会
- 人生は戰場なり
- 他三十篇

四六判上製
二二五頁
定價一圓
送料九錢

發行所 東京市神田區保町二ノ六番 興成館

終